

愛されることで恒久的施設に

群馬県建設業協会（青柳剛会長）は15日、前橋市の群馬建設会館で建築家の坂茂氏を招き特別講演会を開いた。県内外から約300人が集まり、坂氏が世界中で手掛けた建物の解説や紙管を使った被災地での支援活動の事例に聞き入った。



講演する坂氏

群馬建協、坂茂氏招き講演会

青柳会長は冒頭、「建設といったら大きくくりの中でも土木や建築、建築でも計画と施工、そして設備・電気など細かくジャンル分けをすることができ

る。建築の表現を通してモノづくりに向かう姿勢を感じ、それぞれの立場から原点を確認し合える場になればと期待している」とあいさつした。
「作品づくりと社会貢献の両立を目指して」と題して講演した坂氏は、国内外の作品を紹介。代表作の一つであるパリの『ボンブドゥー・センター・メス』に仮設事務所を設けた経験を披露した上で、「街の中心から離れた建設地だったが、街とつながる建物にしたいと考えた」と述べた。
2024年にユネスコの世界で最も美しい美術館最優秀賞に選ばれた『下瀬美術館』（広島県大竹市）でも「市中心部から遠いため、リピーターをつくりたいと考え、台船の上にギャラリーを乗せ展覧会に合わせて配置が変わるようにした」と説明した。

文化的背景を聞き取る

世界中で実施する被災地支援の活動は、「設計をする中で、建築家があまり社会の役に立っていないと気づいた」ことを契機に始めたという。紙管を使い、1995年の阪神・淡路大震災では、被災者のための仮設住宅や教会を設計した。「神戸の教会は結婚式や音楽会の会場としても10年間活用され、街の復興のシンボルとなった」と話す。

講演後には多数の参加者が質問を投げ掛けた。設計事務所に勤めて2年目の女性からの「人々に愛されるモノをつくりたい」と思い仕事をしている。使う人の気持ちやどのように把握しているか」との問いには「まずは話を聞くこと。文化的背景を勉強することが大事だ」としつつ「日本の縁側やヨーロッパの屋外に設置されたカフェのように、中と外との中間的領域の創出はどんな文化でも重要になる」と指摘した。
「コストとデザインをどう両立しているのか」との学生からの質問には、「若い時はコストを考えすぎず好きなモノを設計することが大事だ」とエールを送った。

【上毛新聞 令和7年1月17日】

前橋 世界的建築家の坂茂さんが15日夜、前橋市の群馬建設会館で講演した。「作品づくりと社会貢献の両立を目指して」と題

建築家の坂さんが 避難者支援紹介



群馬建設会館で講演

し、自身の作品や災害被災地で取り組む仮設住宅建設などの活動を紹介した＝写真。

坂さんは能登半島地震やロシアによるウクライナ侵攻で避難者らの支援に取り組んでいる。「世界中で皆さんに愛される建築を造りたいと思って活動を続けている」と強調し、仮設住宅は現地で資材を調達したり、恒久的に利用できる工夫を凝らしたりしていることを説明した。

県建設業協会（青柳剛会長）が主催し、約300人が参加した。

坂さんは2014年に建築界のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞を受賞。昨年、下瀬美術館（広島県）が世界的な建築賞「ベルサイユ賞」の「世界で最も美しい美術館」に選ばれた。

（真尾敦）